

島内地下式横穴墓群から新たに出土した 受傷痕の認められる古墳時代人骨

Additional Examples of the Injured Protohistoric Kofun Skeleton Excavated from Shimauchi Underground Corridorstyle Burial Chambers in Southern Kyushu

竹中正巳¹⁾・柄本優子²⁾・下野真理子¹⁾

Masami TAKENAKA, Yuko ENOMOTO and Mariko SHIMONO

はじめに

島内地下式横穴墓群は、宮崎県えびの市大字島内字平松、字杉ノ原に所在する。加久藤盆地を西に向かって流れる川内川の南側の河岸段丘上にあり、遺構の範囲は東西1100m、南北500mに渡る。

島内は5世紀後半から6世紀代に造営された墳墓群で、2009年11月末までに、127基の地下式横穴墓の調査が行われている。古墳時代の人骨の他に、甲冑、蛇行剣、骨鏃をはじめとする多数の副葬品が出土しており、多数の鉄製武具や骨鏃など特徴的な副葬品は、全国的にも注目を集めている。南九州の古墳時代の埋葬遺跡で、人骨と副葬品の保存状態が良好な遺跡はそれほど多くない。島内地下式横穴墓群は、南九州の古墳時代人の形質・文化・生活様式を知る上で、極めて重要な遺跡である。

これまでに、島内地下式横穴墓群から殺傷行為による受傷例と考えられる3例が報告されている(竹中ほか, 2001)。近年の島内の発掘調査で出土した2体の人骨に新たに殺傷行為によると考えられる受傷痕が確認された。本稿では、新たに加わった2例の受傷痕について、人類学的精査を行った結果を報告する。

資料および観察方法

研究を行った人骨は宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群から出土した104号墓4号人骨(女性・熟年)と126号墓2号人骨(男性・壮年)である。両人骨とも古墳時代後期に属すると考えられる。

島内地下式横穴墓群104号墓4号人骨(女性・熟年)の保存状態はよくはない。赤色顔料の付着も認められない。逆に、島内地下式横穴墓群126号墓2号人骨(男性・壮年)の保存状態はよい。

¹⁾ 鹿児島女子短期大学

²⁾ 宮崎県立西都原考古博物館

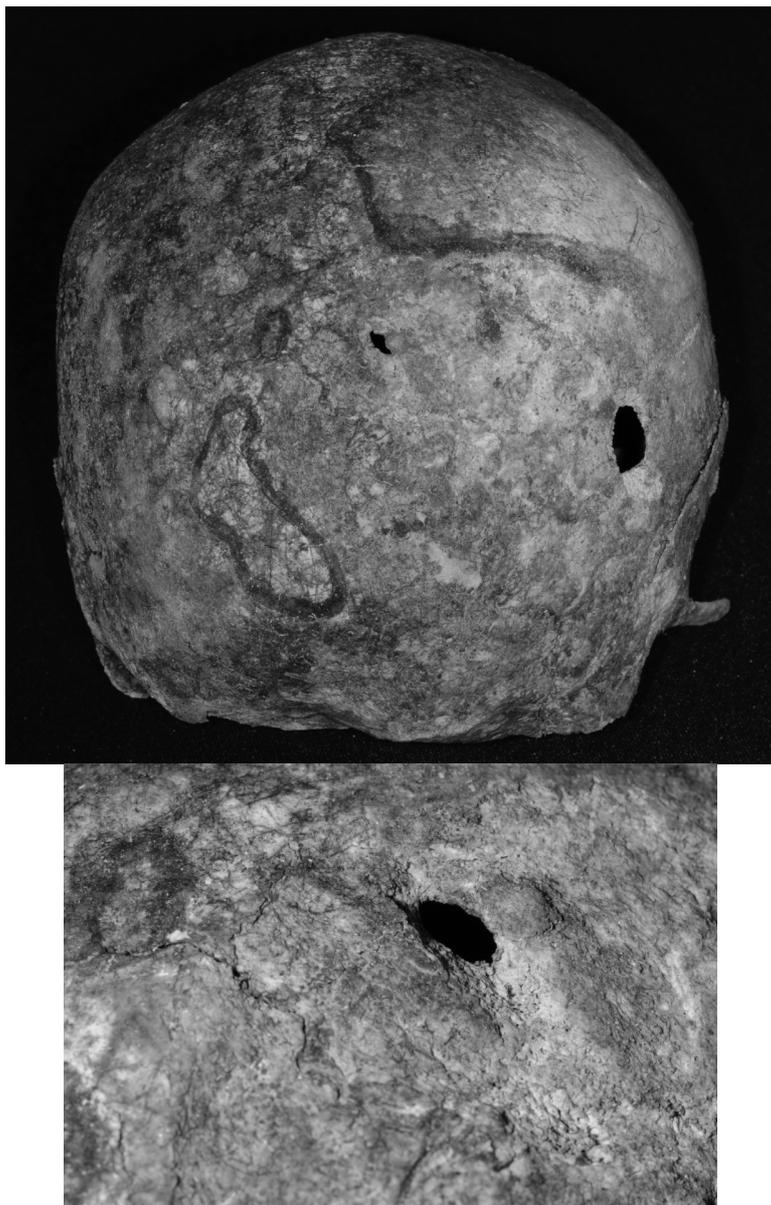


図1 島内地下式横穴墓群104号墓4号人骨(女性・熟年)の受傷痕 右頭頂骨ラムダ付近の骨欠損

この頭蓋には赤色顔料が付着しており、顔面から右後頭部にかけての部位に認められる。左頭頂骨から後頭骨にかけての脳頭蓋の左半分には付着していない。

受傷痕は島内104号墓4号人骨(女性・熟年)の右頭頂骨のラムダ付近と島内126号墓2号人骨(男性・壮年)の前頭骨に認められる。観察は、肉眼とX線写真の撮影により行った。

観察結果と考察

1. 島内地下式横穴墓群104号墓4号人骨(女性・熟年)の受傷痕(図1)

頭蓋の右頭頂骨のラムダに近くにだ円状の骨欠損が認められ、これがラムダから約2cmのところに存在する。この骨欠損は、外板表面では長径16mm、短径6mmのだ円である。内板表面では、長径9mm、短径4mmのやはりだ円を示す。外側の骨欠損の左側(矢状縫合に近い側)の縁およ



図2 島内地下式横穴墓群126号墓2号人骨(男性・壮年)の受傷痕
頭蓋の正面観・右側面観・上面観 前頭部の受傷痕

び右斜め下側は海面質が露出しているが、凸凹はない。だ円の左右の長い縁は滑らかな平面をなし、上下の強い弯曲部分も滑らかに曲がる。他の骨の部位の色調と変わるところもない。したがって、この欠損は最近生じたものではない。この骨欠損は何かが刺さった時にできた傷痕の可能性が高い。それは傷口の大きさや形状から、両刃の鍔または剣の切っ先が刺さってできた傷痕であろう。内板をも貫通しており、切先は少なくとも数mmは頭蓋腔内に入っていたと推定できる。そうだとすると、入った切先が脳膜中の血管を傷つけ、この傷が致命傷になった可能性は十分考えられる。また、右斜め下方の海面質の露出した滑らかな弯曲部分の面積は大きい。これはこの傷を作った武器がこの方向から達したことを示している。

2. 島内地下式横穴墓群126号墓2号人骨(男性・壮年)の受傷痕(図2)

本人骨には前頭骨の左側に大きな骨欠損が認められる。この陥没は大きさが左右36mm、前後21mmの蒲鋒形をした骨欠損である。ちなみに蒲鋒形の骨欠損の頂部は前方側、蒲鋒形の底部は前頭

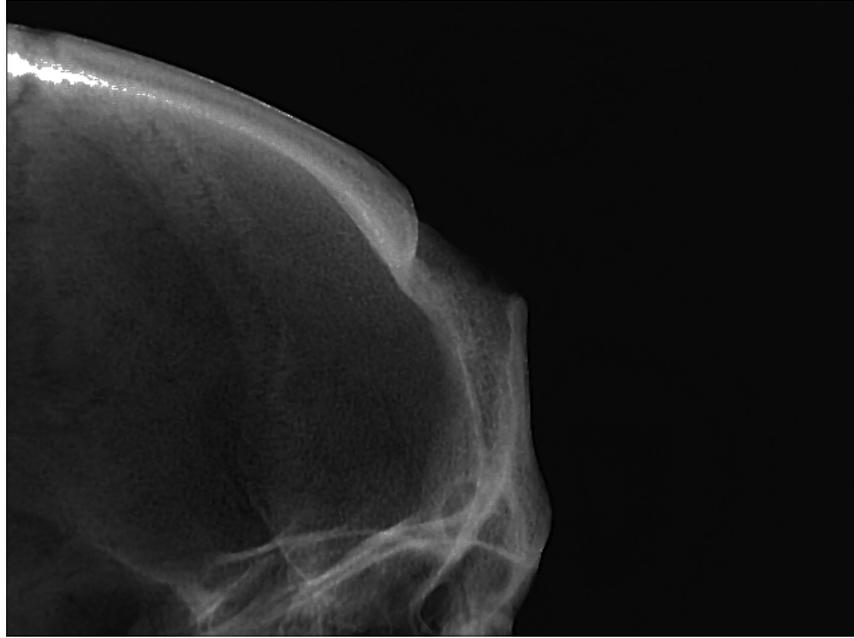


図3 島内地下式横穴墓群126号墓2号人骨(男性・壮年)の前頭部受傷痕のX線写真

縫合側の後方に相当する。前方の傷口周囲は上前方に隆起している。前方の傷口の深さは深いところで約12~15mmである。海面質は露出しておらず、治癒機転が働いたことがわかる。後壁も傷口の深さは深いところで約12mmで、海面質は露出しておらず、治癒機転が働いている。頭蓋外板の右側の傷口の縁は正中線を越えており、その右約7mmの点に向かって外板の表面が沈んでいる。また、傷口後縁の約5mm後方には2次骨折線が治癒した痕跡が肉眼でも確認できる場所がある。頭蓋内腔の方向から内板表面を観察しても、受傷時、傷口の後縁に2次骨折線が存在し、それが治癒したことがわかる(図3)。この傷は、受傷痕であり、傷をもたらした武器の形状は蒲鋒形に近い形状をしていたと思われる。この傷をもたらした武器であるが、石斧のようなものを想定したい。頭蓋の上方から下方に打ち下ろされたと推測される。治癒の痕跡から、この傷は少なくとも死亡する1年以上前に受けた傷であろう。

3. 島内地下式横穴墓群から出土した受傷人骨

今回報告した2例を含め、これまでに地下式横穴墓から出土した受傷人骨は6例に上る(表1)。その内の5例が島内地下式横穴墓群からの出土である。島内からは、これまでに180体を超える人骨が出土しており、受傷人骨の割合は約2.8%程度となる。受傷人骨の多数報告されている弥生時代の北部九州でも、受傷例が出土人骨や墓の中で占める割合はおそらく1%にも満たないと言われている(中橋, 1996)。集団間の戦争が激しかった弥生時代の北部九州でさえ、受傷人骨の占める割合は1%程度とのことであり、島内地下式横穴墓群の受傷人骨の占める割合は明らかに高い。

これまで島内の受傷者について、集団間の戦争・戦闘による犠牲者である可能性だけではなく、事故や私怨による傷害行為を受けた可能性が提示されてきた(竹中, 2001)。しかし、今回の新たな2例の受傷人骨の出土によって、これまでの受傷人骨の報告例も含め、戦闘行為の犠牲者と考

表1 南九州における古墳時代の受傷人骨

出土地	遺跡・人骨番号	性別・年齢	受傷痕の認められる骨の部位	文献
宮崎県 えびの市	島内地下式横穴墓群 87号墓1号人骨	男性・熟年	骨盤下から破折した骨鏃	竹中ほか (2001)
宮崎県 えびの市	島内地下式横穴墓群 89号墓1号人骨	男性・熟年	前頭骨に陥没骨折	竹中ほか (2001)
宮崎県 えびの市	島内地下式横穴墓群 99号墓2号人骨	男性・壮年	頭蓋(2カ所), 右鎖骨(1カ所), 左肩甲骨 (1カ所), 左肋骨(1カ所), 右寛骨(1カ 所), 左寛骨(1カ所), 右脛骨(1カ所), 右腓骨(1カ所)に斬・切・刺創	竹中ほか (2001)
宮崎県 えびの市	島内地下式横穴墓群 104号墓2号人骨	女性・熟年	右頭頂骨ラムダ付近に刺創	本研究
宮崎県 えびの市	島内地下式横穴墓群 126号墓2号人骨	男性・壮年	前頭骨に陥没骨折	本研究
宮崎県 国富町	常心原地下式横穴墓群 7号墓1号人骨	男性・熟年	左ラムダ縫合上に陥没骨折	竹中ほか (2007)

た方がよいことは明らかである。

島内地下式横穴墓群は甲冑をはじめとする多数の武具・武器の副葬等から、周辺の地下式横穴墓群と比べ、特殊性が指摘されてきた。地下式横穴墓は現在の宮崎平野部から大隅半島平野部にかけての南九州の東側の地域に分布する。多数の地下式横穴墓が調査されているが、殺傷痕が認められる人骨は島内地下式横穴墓群からのものがほとんどを占める。島内を営んだ人々が戦わざるを得ない状況下であり、集団間の戦いの犠牲者もこのように存在した。島内の人々が戦わざるを得なかった理由としては、南九州の内陸部における首長層の出現や地域集団の形成と統合、階層化に伴う戦いの激化が理由ではなかろうか。受傷痕の認められる人骨の出土は、島内を営んだ人々の置かれた政治状況や社会状況を考える上で興味深い。

引用文献

- 中橋孝博(1996)「人類学からみた弥生の戦い」、『倭国乱る』。p158-161。朝日新聞社。東京。
- 竹中正巳・東 憲章・中村直子ほか(2007)「地下式横穴墓から出土した古墳時代人骨に認められた陥没骨折」。南九州地域科学研究所所報23:9-13。
- 竹中正巳・峰 和治・大西智和・小片丘彦・染田英利(2001)「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土人骨」、『島内地下式横穴墓群』。えびの市埋蔵文化財調査報告書29:別編1-109。

(2009年12月2日 受理)